二河白道の譬喩を溯りて

石橋誠道

世界の三大宗教として佛教と基督教と儒教とを擧げるならば、それは異論があるであらふ。何故なれば、儒教は宗教といふよりも寧ろ政治道德教であるから。然しながら世界の三大聖人として釋尊と基督と孔子とをあげるならば誰人も恐らくは異論はなからふ。それはその教化の範圍が非常に廣くてしかも長かつたから。

さてこの三聖三教の行き方は各の少し宛違つてゐる。卽ち佛教は智的であり、基督教は信仰的であり、儒教は政治的である。けれども此等が終には、自分の身を治め德を積むといふことになる點は殆んど一致すると言ふべきである。その譯は、儒教の理想は、齊家、治國、平天下であるが、遂には修身に歸續する。故に大學の中に、古の明德を天下に明かにせんと欲するものは先づ其國を治む、其國を治んと欲するものは先づ其家を齊ふ、其家を齊へんと欲するものは先づ其身を修む、其身を修んと欲するものは先其心を正ふす、其心を正ふせんと欲するものは先其意を誠にす、其意を誠にせんと欲するものは、先づ其知を致すといふてある通り齊家治國の原因は正心正意にあることは明かである。

基督教は神を信じ神を愛することが極力教へられてある。けれども又各自の德性を涵養し、同胞を仁愛することも教へられてある。例へは馬太傳の第五章に、汝らは世の光なり、山の上にある町は隱るゝことなし、また人は燈火をともして升の下におかず、燈臺の上におく、斯くて燈火は家にある凡ての物を照すなり、斯の如く汝らの光を人の前に輝かせ、これ人の汝らが善き行爲を見て、天にまします汝等の父を崇めんが爲なりといひ、

また馬太傳の第五章に、目にて目を、齒にて齒をと云へることあるを汝らは聞けり、されど我れは汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗すな、人もし汝の右の頰を打たば左をも向けよ、汝を訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ、又汝の隣を愛し汝の仇を憎むべしと云へることあるを汝等きけり、されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者の爲めに祈れ、これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり、天の父はその日を惡しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり、汝ら己れを愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取稅人も然かするにあらずや、然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

又馬太傳の第六章に、汝ら見られん爲に己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ、然らずば天にいます汝らの父より報を得じ、さらば施濟をなすとき僞義者が人に崇められんとて、會堂や街にて爲すごとく、己が前にラッパを鳴らすな、誠に汝らに告ぐ、彼らは已にその報を得たり、汝は施濟をなすとき、

右の手のなすことを左の手に知らすな、是はその施濟の隱れん爲なり、然らば隱れたるに見給ふ汝の父は報い給はん。と言はれてある。

此等は何れも神を信仰するからには、神のお心に稱ふやうに、しかもその神の完全にまします如く自己の德性を涵養せよと敎ゆるのである。この點に於て佛敎の諸惡莫作衆善奉行と終には一致することになる。

次に佛敎は、正智を得るといふことに最も力を入れて敎へられてある。そはこの世にあるすべての罪惡、人生の諸の苦痛は、みな貪瞋痴の三毒から起り來るのだ、この三毒の中でも、愚痴が最も根本である、この愚痴無明を除くことに依つて自ら正見正智が顯はれ來り、從つて貪瞋等の諸の罪惡も、人生の苦痛も悉く除かるゝものと考へられてあるから、この正智を得るといふことが、最も重く見られてあるけれども正智を得んとすれば、佛の敎誡に從つて、自己の德性を涵養し、正しい行、正しい心を養つて以つて正智を得べきものと敎へられてある。

斯ふして見ると三敎各の多少の相違のあることは言ふまでもないが結局修身積德を根本とすることは明かである。けれども今はこの三聖の人格を比較しやうといふのではない、また三敎の相違を辨別するのでもない。たゞ佛敎は世界の諸宗敎の中で最も智的であるといふことを示す序言に過ぎない。

凡そ宇宙間にあるすべての現象は、みな相反する二の對立から出來てゐるやうに思はるゝ。例へば天

地、陰陽、男女、始終、本末、長短、大小、善惡、苦樂等である。

貪欲と瞋恚は、吾々の心の相反した二の對立であらねばならぬ。卽ち吾人の心の順逆に由つて現はれて來る現象である。吾人の欲望に順つてそれが强きを增した塲合は、それが卽ち貪欲となり、吾人の欲望に逆つてそれが强くなつた時には、忽ちそれが瞋恚となる。そうしてすべての罪惡は、みなこの貪瞋の二つから流出するのだ。

けれども、もう一つ溯つてこの貪瞋の起つて來るその原因を尋ねて見ると、吾人の心が冥暗で、智慧の光明が輝いてゐないからである。卽ち愚痴暗迷で、悟りの大道を步むことが出來ないからである。だから佛敎では、すべての迷の根本はこの愚痴に由るものだと考へてゐる。後にはこの愚痴の事を無明といふ言に代へて使つてゐる。無明といふのは智慧の光明のない事を意味するので、心の無明暗黑を表はすのだ。卽ち心が愚痴であり、無明であり、暗黑であり、暗黑である所から、眞理に迷ひ、事物の道理に迷ひ、善をなさずして惡を造り、德を行はずして罪を犯すといふことになる。だから此等のすべての弊害を除くには、まづ愚痴を除くといふことが最も先決問題であると考へられてある。だから佛敎ではどこまでも智慧を磨いて、すべての愚痴無明を盡く無くしなければならないと敎へられてある。この點から考へても佛敎はどこまでも智的宗敎で、智慧を研くといふことに最も力を注いだといふことは明かである。世界のあらゆる宗敎の中で、佛敎が最も智的に發達して來た原因もその源は全くこゝにあるの

だ。

斯ふした譯で、すべての罪惡の根本は卽ち貪と瞋とにあり、その又貪瞋の根源は愚痴にあるといふ所から、貪瞋痴の三を罪の根本と數へ、是を三毒、三刺、三穢、三憊、三衰、三病、三縛等と稱へた。

例へば中阿含の二十五卷には、三毒を三穢と名け染心穢、恚心穢、痴心穢と說かれてある。又中阿含の二十一卷には、左の文句がある。「復た次に三刺あり、欲刺、恚刺、愚痴刺なり、此の三刺は、漏盡の阿羅漢は、已に斷じ、已に知り、根本を拔絕して、滅して復た生ぜずと。又雜阿含の十八卷には、舍利弗言はく、貪欲已に斷じて餘りなく、瞋恚愚痴已に斷じて餘りなきを是れを阿羅漢と名くと說かれてある。然し阿含經の中には三毒といふ名月はないやうであるが、雜阿含の十七卷に貪瞋痴等が毒箭に喩へてあるから斯ふした所から、後には此等を三毒と稱へるやうになつたのであらふ。

そうしてこの三毒の起る順序も、先づ自分の心に順應する所から貪欲を起し、其の貪欲が深くなればなるほど大きな罪を犯すやうになる。金持と塵塚はたまるほどきたないといふ諺もある通りに、だんだんと欲が深くなると、偸盜もする、殺人もする、虛言も言ふ、詐盜もするといふやうに多くの罪はこの心から生れて來る。

また若しその貪欲の心に逆つて、思ふやうにならない時には瞋恚を起して、惡口をする。喧嘩をする人殺しもする、といふやうに此から生ずる罪も甚だ多い、

斯樣にあらゆる罪惡は、みな貪瞋から起つて來るがその源は矢張愚痴である。だから貪瞋痴といふ順序を取り、愚痴を最後においたものであらふ。これはまづ貪欲を去り、次に瞋恚を去り、後に愚痴を去つて完全な人格に到達するといふ滅罪の順序から斯ふ配列されたものに違いない、若し罪惡の起り來る順序から云へば、愚痴、貪欲、瞋恚と次第すべき筈である。だから小乘敎の十二因緣起の順序次第は、無明（愚痴）行、識、名色、六入、といふ順序が取られてある。又起信論の眞如緣起の說明も、忽然念起の無明といふものが、生死流轉の根源であるとされてある。

此の無明に就ても後の諸大乘敎に於ては隨分複雜に說明されてあるが、阿含等に說かれてある無明の意味は全く愚痴と同一である。雜阿含の九卷には、云何んが無明となすや、尊者舍利弗言はく、謂はゆる無知なり、無知をは是れを無明となす、云何んが無知なるや、謂く眼は無常なるに如實に知らざれば是れを無知と名く、中略、云何んが明となすや、舍利弗言はく、謂ゆる知なり、知は是れ明なり、云何んが知となすや、謂く眼は無常なることを如實に知るなり、と言ふてある。

又雜阿含十卷に、云何んが是れ無明なるや、舍利弗答て言く、無明とは謂く不知なり、不知は是れ無明なり、云何んが不知なるや、謂く色は無常なり、色の無常なることを如實に知らざるなり、中略、愚闇不明を是を無明と名く、此れを成就するものを無明ありと名く、又問ふ、舍利弗、謂ゆる明とは、云何んが明となすや、舍利弗言く、謂ゆる明とは、云何んが明となすや、舍利弗言く、謂ゆる明とは是れ

知なり、知は是を明と名くと言はれてある。

又雜阿含廿八卷には、世尊諸の比丘に告ぐ、諸惡不善の法は、一切皆な無明を以て根本となす、其故は無明は無知なれば、善不善の法に於て如實に知らず、有罪無罪、下法上法、染汚不染汚、分別不分別緣起非緣起を如實に知らず、如實に知らざるが故に邪見を起す、邪見を起し已て能く邪志、邪語、邪業邪命、邪方便、邪念、邪定を起す、若し諸の善法を生ずるは、一切皆な明を根本となす、明とは善不善の法に於て如實に知るなり、罪無罪、親近不親近、卑法勝法、穢汚白淨、有分別無分別、緣起非緣起を悉く如實に知る、如實に知らば是れ則ち正見なり、正見なれば能く正志、正語、正業、正命、正方便、正念、正定を起す、正定起り已れば、聖弟子正く貪恚痴を解脱することを得る。貪恚痴を解脱し已れば是れ聖弟子正智見を得る、我生已に盡き、梵行已に立し、所作已に作す、自ら後有を受けざる事を知ると說かれてある。

此等の聖語は、みな愚痴無明から總ての罪惡の起ることを述べ、智慧の明を以つて無明の暗を滅すことに依つて完全なる人格を得て眞の解脱を得ることが示されてある。

已上は主として原始佛敎特に阿含の聖典に就て、三毒の事を明かしたのであるが、後の諸の發達せる大乘の敎義に於ても、此の三毒はすべての煩惱の中で最も重きものと見られてあることは事實である、まづ俱舍で云へば、その根本の煩惱として、貪瞋痴慢疑等の十種があげてある。唯識論でも根本の煩惱

として貪瞋慢疑惡見の六種があげてある。天台で云へば、見思、塵沙、無明の三感の中見惑八十八使を數へ、身邊邪敎戒貪瞋痴慢疑の十種を以てその煩惱の主體とされてある。そうして無明をその根本の煩惱とされてある。斯ふした譯で、佛敎全體の要領は、諸惡莫作衆善奉行にあると同樣に、全佛敎の本領は、貪瞋痴の三毒を除くにあるのだ。

故に學問研究の力、或は實驗修行の功に依つて、是非善惡の理を明かにし、或は修養鍛練に因つて、貪瞋痴等の勢力を削減して、高尙なる品性、完全なる人格を養成し、それに依つて自然に佛の訓誡、戒律の條項をも護ることが出來、知識に於ても修行に於ても、完全無缺の人となるのが卽ち佛陀正覺者であるのだ。これが卽ち全佛敎の眞の理想であることは言ふまでもない。

所が此は理想として最も完全なものではあるが、之を實際に行つて、實現するといふことは、極めて困難な事である。

古來の諸の聖者達は愛欲をも犧牲にし、情熱をも忍耐してそれの實現に努められたが、今日吾々が現代の社會に生存して、生活を續けて行かふとするには、その三毒を盡く除くといふことはとても出來ない相談である。だから貪瞋をその儘に、しかも正智を辿りつゝ正覺の彼岸に到達せんとする一種特別の救濟法がなくてはならぬ。この實際の要求に應じて起つたものが卽ち淨土敎である。そこで淨土敎は、始は智的に發達したが、後に實際問題に直面して、信仰的にならざるを得なかつたのだ。淨土敎の起源

は全くこゝに淵源する。言ふまでもなく淨土敎は、貪瞋痴慢のすべての煩惱をそのまゝに、しかも正智の白道を辿り、深く佛を信賴し、仁慈の加祐を蒙りつゝ、正覺の彼岸に到達せんと努力するのが、他力信仰の敎である。かの二河白道の譬は、卽ちそれを說明したものだ。

佛敎の中には古來多くの譬喩がある。中にも法華經の長者窮子の喩、火宅三車の喩　或は佛說譬喩經の、空井四蛇の譬等は、その中有名なものである。けれど吾々日常の生活心理の有樣を、最も適切に言ひ顯はし、淨土敎の要義を總括して、最も平易簡明に說き明かし、しかもその構想の極めて巧妙なことにおいては、二河白道の譬ほど巧に出來てあるものはあるまい。

所がこの二河白道の喩は、何か經典に典據があるか。或は善導大師の案出であるか。若くは大師が古來の幾多の譬喩を添削合糅して、新たに案出されたものか。又は當時行はれた、喩を採用されたのか、今それを知る由もないが、恐くは大論の二河狹道の喩・略論安樂淨土義の脫衣渡河の喩、涅槃經の逃人渡河の譬等を取捨合糅して、構成されたものだと思ふ。

それに就て記主禪師は散善義記一卷にこの二河白道の喩は、涅槃經の逃人渡河の譬、及び大論の二河狹道の譬に依つたものであらふが、然しなほ檢べて見よと言はれてある。また記主禪師の散善義略抄には二河白道の譬に就て問答をあげて、問ふ、この譬は何の證あるや、答ふ、大集經に此文ありと言はれてある。

所が涅槃經と大論には確かに其譬があらはれてゐるが、大集經の譬は余は遂に檢し得なかつた。今その經論の譬は斯ふである。

北本涅槃經二十三に云く、我れ昔し無數劫よりこのかた、この身心の爲に種々の惡を造る。この因緣を以て、生死に流轉し、三惡道にあつて、具さに衆苦を受けて、遂に我をして三乘の正路に遠ざからしむ。菩薩よ、是の惡因緣を以の故に己が身心に於て大怖畏を生じ、衆惡を捨離して善通に趣向す。善男子よ、譬へば王あり、四の毒蛇を以て之を一篋に盛て人をして瞻養し餧飼し臥起して其身を摩洗せしめ若し一の蛇をして瞋恚を生ぜしむれば、我れ法に準じて之を都市に戮すべしと命ず。

その時其人、王の敕令を聞て心に惶怖を生じ、篋を捨てゝ逃げ去れり。王時にまた五人の旃陀羅を遣はして刀を扱いて後ろに隨はしむ。その人廻顧して後の五人を見て遂に疾く捨て去りぬ。この時に五人は、惡の方便を以て持つ所の刀をかくして、密かに一人を遣はして、詐つて親善をなして之に語つて言く、汝還り來るべしと。その人信ぜずして一の聚落に投じて、自ら隱匿せんと欲す。既に聚落の中に入つて諸の舍を閲ひ看るに都て人を見ず。瓶器を執捉するに悉く空にして物なし、既に人を見ず、物を求るに得ず、卽ち地に坐して、空中の聲を聞く、咄哉男子、此聚落は空曠にして居民あることなし、今夜まさに六大賊ありて來るべし、汝もし遇はゞ、命はまさに全からず、汝はまさに云何がして之を免るゝこと得べけんやと。

その時其人、恐怖遂に增してまた捨てゝ去りしが、路に一河に値ふ、その水漂急にして船筏あることなし、畏怖を以の故に卽ち種々の草木を取つて筏となせり。また更に思惟すらく、我れもし此に住せばまさに毒蛇と、五の旃陀羅の一の詐り親む者と、及び六大賊に危害せらるべし。若しこの河を渡るに、筏依るべからざれば、まさに水に沒して死すべし、寧ろ水に沒じて死すとも、終にかの蛇賊の爲に害せられじとて、卽ち草筏を推して之を水中に置き、身その上に倚つて、手に抱き脚に蹋んで流を截つて去れり。既に彼の岸に達して、安穩にして患ひなく、心意泰然として恐怖消除するが如し。菩薩摩訶薩よ大涅槃經を聞き、受持することを得て、身は篋の如く、地水火風は、四の毒蛇の見毒觸毒氣毒齧毒の如しと觀ず。一切衆生この四毒に遇ふ故に、その命を喪ふ。衆生の四大もまた復た是の如し、或は見、惡を作し、或は觸、惡を作り、或は氣、惡を作り、或は齧、惡を作る。この因緣を以て、衆善を遠離す。

已上は涅槃經の上の喩であるが、大論の文は下の通りである。

大論三十七卷に、或は衆生あり、一切皆な空なりといひ、心是の空に著す、是の空に着するが故に、名けて無見となす。或は衆生あり、一切六根所知の法は皆な有なりと謂ふ。是を有見となす。愛多き者は有見に著し、見多き者は無見に着す、是の如き等の衆生有見無見に着す、是の二種の見は、虛妄にして實に非ず、中道を破す、譬へば人狹道を行くに一邊は深水にして一邊は大火なれば、二邊俱に死するが如し、有に著するも、無に督するも、二事俱に失す、所以は如何ん、若し諸法定めて實有なれば、因

緣なし、若し因緣より和合して生ずれば、是の法自性なし、若し自性なければ、卽ち是れ空なり、若し法なきを實とすれば、罪福なし、縛なく解なし、亦た諸法種々の異なし。といふてある。次に略論の譬は斯ふである。

略論安樂淨土義に云、問ふて曰く、下輩の中に十念相續して便ち往生を得ると云へり、云何なるを名けて十念相續とするや、答て曰く、譬へば人あつて空曠の迥かなる處にして、怨賊の刄を拔て勇を奮つて直に來つて殺さんと欲するに値遇す、其人勁走するに渡る可き一河のあるを見る。若し河を渡ることを得ば、首領全かるべし、爾時但だ河を渡るの方便を念ず、我れ河岸に至らば、衣を着けて渡らんか、衣を脫して渡らんか、若し衣納を着せば恐くは過ることを得ず、若し衣納を脫がば、恐くは暇を得ることならんと、但だ此の念のみあつて、更に他緣なく、專らいかにして河を渡るべきかを念ずるは是れ一念なり、是の如く雜らざる心を名けて十念相續するが如し、行者も亦た然り、阿彌陀佛を念ずるに、彼の渡を念ずるが如くにして十念を經よ、已上

この外なほ二河白道に類似した譬があるかも知れないが、余は未だそれを檢じ得なかつた。兎も角已上の三喩をよく〳〵考へてみると、いづれもよく似た所がある。白道と水火の二河は全く大論の狹道二河の喩に類し、空曠の處に於て、群賊惡獸に遇ふことは、涅槃及び略論に類し、西岸に至つて安穩なりし事は涅槃經の譬に似てゐる。死を決して道を進み、一心に渡河を念ずることは涅槃幷に略論に類し似

てゐる。

又二河白道の喩は、貪欲を水に喩へ、瞋恚を火に譬へられてある。是は最もふさはしい譬で、水は下きに順ふ所から、心に順ふ貪欲に喩へ、火は逆上する所から、心に逆らふ瞋恚に譬へられたのだ。けれどもこれも佛經の中に、諸所に斯る例がある。例へば楞嚴經の中には、貪欲を水に喩へ、また貪心の顯はれ易い愛をも水に喩へてある。

楞嚴經の第八卷に、十方一切の如來は、多求を色目して貪水と名く、菩薩貪を見ること瘴海を避るが如しといひ、又同卷に、諸の愛染に依つて妄情を發起す、情積んで休まず、能く憂水を生ずといひ、又八十華嚴の三十七卷には、業を田となし、識を種となし、無明の闇覆、愛水潤をなすと說かれてある。また愛欲の事を河水に喩へた例として、八十華嚴の二十六卷に、生死の流に隨つて大愛河に入るといひ、楞嚴經の四卷に、愛河枯乾して汝をして解脫せしむと言はれてある。

また瞋恚を火に例へた例も多くなる。例へば增一阿含經の十四卷に、諸佛の涅槃、汝は竟に遭遇せず皆な瞋恚の火に由るなりといひ、又遺敎經には、瞋心は猛火よりも甚し、常にまさに防護して入ることを得せしむることなかれ、功德を劫むるの賊は、瞋恚に過ぎたるはなしと說かれてある。

恐くは善導の二河白道の喩は、此等の譬喩を取捨合糅し、隨義轉用して構成されたものであらふ。然しながら此の喩が、最も巧に、しかも意味深長に、作られてあるといふことは、寔に驚嘆に堪へない譯

である。之に依つてまた大師が、如何に熱烈なる信仰家であつたか、またいかに深遠なる思想の持主であつたかといふことも、深く拜察さるゝ所以である。

さて佛敎は智的に起り、增々智的に發達した。然しながら後に淨土敎の一派は、全く信仰的に變化した。けれども矢張正見正智を忘れてはならぬ正道を誤つてはならぬといふことを極力敎へた。卽ち二河白道の喩はそれである。たとひ貪瞋煩惱の波が、いかに正見の白道を覆ひ隱すとも、其の白道を歩みはずさぬやうに、水火の二河に溺れぬやうに、努力しつゝ進むといふのが、卽ちその意である。

斯ふした譯で、二河白道の譬喩は、淨土往生の敎義の大要を喩へたことは勿論であるが、現代のやうな複雜な社會、生存競爭の激しい時代に處して、生存を續ける者の龜鑑として、最もふさはしい喩である。卽ち諸種の誘惑、安逸、虛榮、愛着等の惡魔は、至る所に怪しい貪慾の手を廣げてゐる。

或は諸の競爭、嫉妬、怨恨、敵慨等の惡鬼は恐ろしい瞋恚の火焰を吹きかけてゐる。斯ふした恐らしいたゞ中に立つても、決してそれ等に妨げられず、常に至誠と眞實の白道を辿つて、一歩は一歩理想の彼岸に近づく時に、其身も社會も自ら淨化せられて、ともに幸福なる生活を享受することが出來るのだだからこの二河白道の譬喩は、斯ふした意味からもまた最も立派な喩であると言はねばならぬ。